

要 旨

「創造力、表現力を高める」ためには、実生活に生きて働く能力を身に付けさせることが有効と考える。本研究では、身近な生活とかかわりのある題材に取り組み、授業で学習したことを実生活に応用できる能力を高める指導の在り方を探ることとした。指導の手立てとして、創造活動における過程で、ワークシートの活用やグループ活動での情報交換を通して、自分の思いを明確にするような場を設定した。また、美術の基礎的能力を高めるために、発想・構想と表現を繰り返す手立てを講じた。その結果、鑑賞する際の視野が広がり、自分の思いを具体的な方法で表現できる生徒が増えた。

キーワード 身近な生活とかかわりのある題材 ワークシートの活用 グループ活動
創造力、表現力

1 研究の目標

中学校美術における創造活動の過程において、身近な生活や地域とのかかわりを通して、自分らしい発想をし、豊かな表現力を培う指導の在り方を探る。

2 目標設定の理由

情報化社会にともない、家庭におけるパソコンの保有台数の増加が著しい。平成18年度に実施された総務省による生活基本調査の結果では、「趣味・娯楽」を行った人のうち、10～14歳の80%近くがテレビゲームやパソコンゲームをして過ごしている。過去20年間の「余暇活動（趣味・創作）」の統計を比較すると、総体的にガーデニングや日曜大工などの手作業を必要とする創造的な活動の割合が低下している。一方、鑑賞する人の数は61.7%と多く、美術や音楽などでは、創作よりも鑑賞を楽しむ傾向にある。学習指導要領（平成11年度改訂版）では、美術科の目標として「美術を愛好する心情を育てる」ことが求められており、生涯を通して創造的な活動を行うための素地をつくるのがこれからの学校教育の課題である。

中学校美術科においては、創造活動を通して、「豊かな表現活動や鑑賞活動をしていくための基礎となる資質・能力を一層育てられる」¹⁾ことを目標としている。「資質・能力」とは、感覚・感性や想像力、技能などである。心豊かな生活を創造していこうとする意欲・態度の形成を図り、将来に向けて学ぶことを実感させるためには、身近な佐賀県の自然や地域などを素材とした教材開発が有効だと考える。

そこで、本研究では、美術の基礎的能力を伸ばすために、生徒の興味・関心を高めることができる身近な生活とかかわりのある題材を考えた。また、創造活動の過程で発想・構想や表現について明確に目標を設定し、創造力、表現力の高まりが見える指導の在り方を探っていきたいと考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

身近な生活とかかわりのある題材を取り上げ、創造活動の際に自分の思いを明確にするために次の手立てを取れば、実生活に生きて働く力が育成され、創造力、表現力が高まるであろう。

鑑賞や評価などで活用する生徒の発想を広げるためのワークシートを開発する。

鑑賞活動では、作品について調べた情報や感想などの意見を交換するためのグループ活動を取り入れる。

地域の自然をモチーフにした手工芸品のデザインをすることで、郷土に対する思いを膨らませる。

4 研究の内容と方法

- (1) 身近な生活とかかわりのある題材を通して、創造力、表現力を高めるための理論研究を行う。
- (2) 創造活動における自己表現についてワークシートを活用し、生徒の変容を分析する。
- (3) 思いを明確にするようなワークシートの活用とグループ活動を取り入れた授業実践及び分析と考察を行う。

5 研究の実際

(1) 文献による理論研究

中学校学習指導要領の美術科の鑑賞の目標では「豊かな発想と工夫、美と機能性の調和、作品に託された願いと造形的なよさに気付き、生活におけるデザインや工芸の働きについて理解すること」²⁾が示されている。遠藤友麗は「実生活の中で生きて働く具体の美的能力をしっかりと身に付けさせていくことが美術の確かな能力と楽しさへの意欲を高めることになる。」³⁾と述べている。さらに、地域独自の美術文化を授業に活用することの有効性を挙げており、それらは「暮らしの中の必要があって生まれたものであり、その土地独自の素材を生かした美術・工芸的能力や表現様式が生かされている。」⁴⁾としている。佐賀県には、美術的評価が高く卓越した技術でつくられた手工芸品が多く、これらの素材を使って生徒の創造力、表現力を高めるためには遠藤氏の理論は適していると考えた。

そこで本研究においては、「創造力、表現力を高める」ためには実生活に生きて働く能力を身に付けさせることが有効であるととらえ、地域の手工芸を題材にした鑑賞の授業で検証を行った。鑑賞活動で自然や美術作品などのよさや美しさ、創造の知恵などに感動し、味わわせることで、鑑賞の基礎的な能力や態度を培うことができる。このことは、表現活動における意欲の高まりにつながるとともに、心豊かな生活を創造していくための基礎になるものと考えた。

(2) 研究の全体構想 (図1)

身近な生活とかかわりのある素材を題材とし、創造力、表現力を高めるワークシートの活用とグループ活動の在り方を開発し、実生活に生きて働く能力を高めるための取り組みを行った。

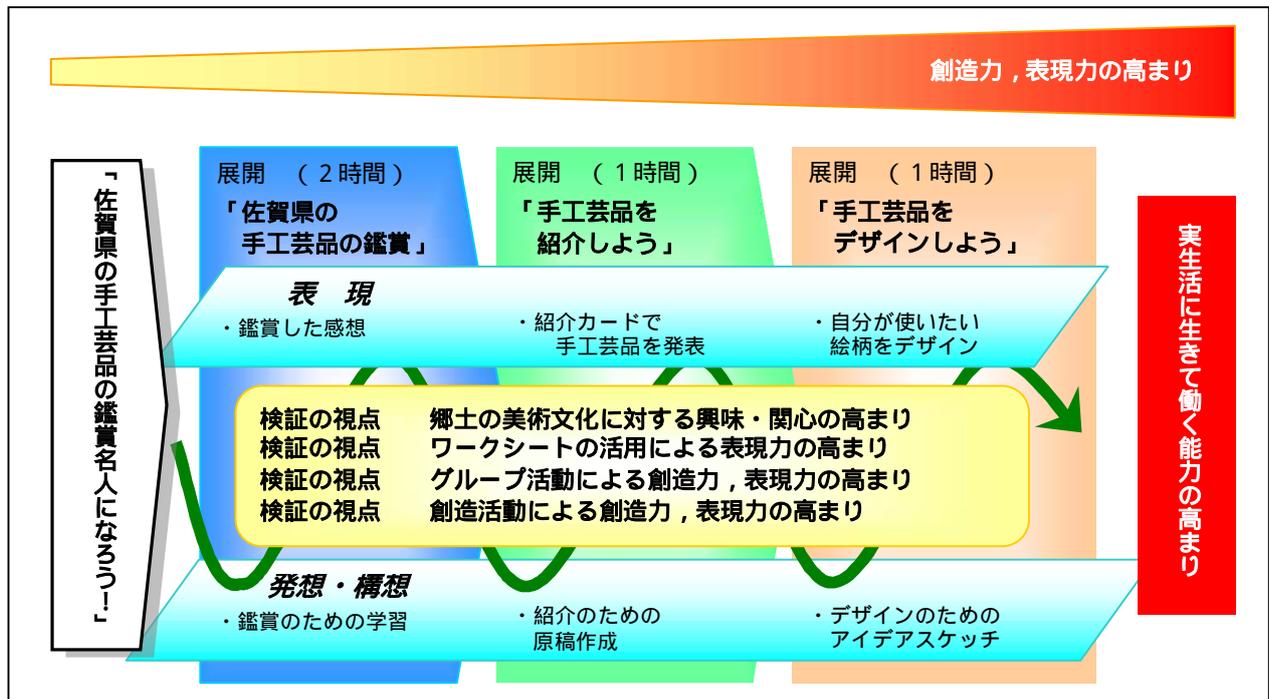


図1 学習の流れと期待される力の高まり

(3) 授業の実際

ア 思いを明確にする手立て

(ア) 身近な生活とかかわりのある題材

生徒にとって身近な素材である佐賀県の手工芸品を題材にすることで、美術文化に対する興味・関心の高まりを検証する。鑑賞の際には、関心を高めるために体験的な活動を取り入れ、歴史や制作工程(動画)をプロジェクトで紹介し、手工芸品(実物)を様々な視点でとらえさせた。さらに、既習の内容を生かして、佐賀県の動植物や特産品をモチーフに手工芸品のデザインをさせた。

(イ) 思いを明確にするワークシートの開発

授業では、手工芸品の見方や感じ方を広げさせるために、手工芸の紹介後、ワークシートに手工芸を説明する上で重要な言葉(キーワード)を書き出させた。また、鑑賞の観点を具体的に提示して感想を書かせたり、それらを参考にして自分で観点を考えさせたりした。さらに、自分や他者の考えのよさに気付かせるために自己評価、相互評価を取り入れた。

(ウ) 視野を広げるグループ活動

作品について調べた情報や鑑賞した意見を交換させ、自分では気付かない角度からの見方や不十分な言葉の表現の補充をさせた。そのことで、感じたことをより具体的に表現させることができると考え、グループ活動を取り入れた。さらに、手工芸品について自分が書き出した観点や感想を基に、紹介カードを班で作成、発表させた。そのことで、自分とは異なる考え方や適切な表現などを参考にさせることで生徒の視野を広げることができた。

(エ) 鑑賞活動を生かしたデザイン

鑑賞活動で手工芸品の背景を理解した後、創造力を高めるために、自分が使いたい手工芸品(有田焼マグカップ・有田焼皿・鍋島緞通・佐賀錦)のアイデアスケッチに取り組ませた。

イ 授業の実践

(ア) 授業の概要

| | | | | |
|-------|----------|--|------------------|--------|
| 題材名 | | 第1学年 領域「B鑑賞」 佐賀県の手工芸品の鑑賞名人になるう | | |
| 題材の目標 | | 佐賀県には、繊細で高度な技術を備えた手工芸品が多数あることに興味・関心をもち、創造活動を通して郷土の美術文化を理解し、表現する能力を高める。 | | |
| 展開 | 時間(全4時間) | 主な学習内容 | ワークシート | 活動形態 |
| | 事前 | 佐賀県の手工芸品についての事前調査 | ワークシート1 | |
| 1 | 第1次 | 佐賀県の手工芸品の鑑賞と調べ学習 | 資料, ワークシート2 | 個 |
| | 第2次 | 佐賀県の手工芸品の鑑賞 | 資料, ワークシート2 | グループ |
| 2 | 第3次 | 佐賀県の手工芸品の紹介カード作成 | 紹介カード, ワークシート3 | グループ |
| 3 | 第4次 | 手工芸品のデザイン, 自己評価・相互評価 | ワークシート4, ワークシート5 | 個・グループ |

地域の美術文化である手工芸品の鑑賞を通して、生活を豊かに創造する能力の育成を目標にした。活動の手立てとしては、より体験的に対象物を味わわせることができるように作品(実物)を提示し、鑑賞の視点を具体的に提示したワークシートを活用させた。鑑賞活動では、グループ活動を取り入れることによって、自分では気付かない角度からの見方や不十分な言葉の表現を補充させる。そのことで、表現力を高めることができると考えた。さらに、鑑賞活動は、つくることへの関心を高めることができることから、身近な自然をモチーフとした手工芸品のデザインをさせた。このことで、生徒は、地域の美術文化の理解を深め、郷土に対する思いを膨らむことができると考えた。アイデアスケッチの際には、活動を支援するために、デザインをするときのポイントをワークシートで提示した。題材終了時には、自己評価と相互評価をさせることで自分や他者の考えのよさに気付かせた。

(1) 手立ての実際と考察

a 身近な生活と関わりのある題材を用いたことについて

事前に生徒の手工芸に対する意識調査（図2）を行った結果、ほとんどの生徒が「手工芸」という言葉を知らなかった。中には有田焼（70.6%）や伊万里焼（23.5%）、唐津焼（11.8%）など名称を挙げる事ができる生徒もいたが、特徴については抽象的な表現が多かった。例えば有田焼についての記述（29.4%）は「表面がツヤツヤしている」や「色はいろいろな色がある」などであった。繊細で高度な技術を備えた佐賀県の手工芸品を鑑賞することにより、これらを構成するデザイン力や卓越した技術力のすばらしさに生徒は気付いた。さらに「鍋島緞通」と「家庭にあるじゅうたん」などの自分の身の回りにあるものと比較したり、手触りや絵柄など作品のよさに気付いたりするなど手工芸品に対する生徒の関心が高まった。また、手工芸品のデザインでは、佐賀県の動植物や特産品をモチーフにしてアイデアスケッチをさせることで、総合的な学習の時間で取り組んだことや美術の既習の内容を応用する姿が見られた。

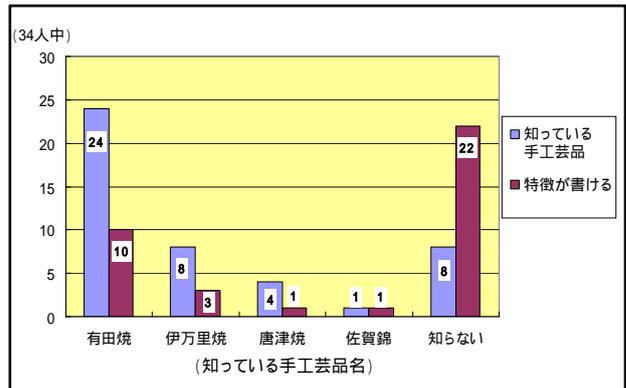


図2 手工芸品に関する事前調査結果

b 思いを明確にするワークシートの開発について

事前調査について分析した結果、鑑賞の観点や作品の背景が分からずに感想を具体的に書くことができない生徒が多く見られた。また、創造活動の際に発想の段階でつまづく生徒を支援するために「作品の背景（歴史、技法、素材など）を理解するための資料を作成する。」「鑑賞の観点を提示する（図3）。」「デザインをするときのポイントを提示し、アイデアを段階的にまとめさせる。」などワークシートの開発を行った。

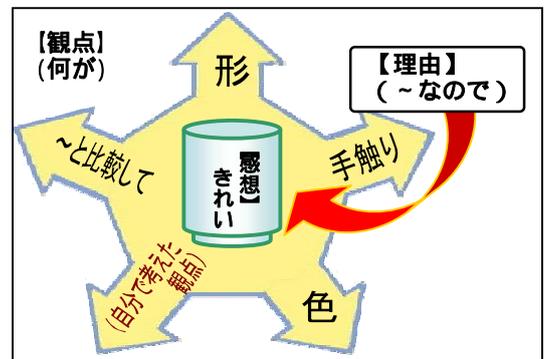


図3 視野の広がり

授業では、佐賀県の手工芸品（有田焼・唐津焼・鍋島緞通・肥前ビードロ・佐賀錦）の鑑賞を行った（写真1）。歴史や技法を紹介し、さらに制作工程は動画や写真を提示した。学習する際には、資料中の手工芸品を紹介する上でキーワードとなる文言に印を付けさせたことで、歴史や技法など学習した内容についての生徒の興味・関心を高めることができた。手工芸品の実物を様々な視点でとらえさせ、資料を参考に観点を明確にして生徒が感じたことを具体的に表現できるようにした。ワークシート2の生徒の記述を見ると、専門用語を使って具体的な感想が見られるようになった。自分でも新たに観点を発見し、感想を書く姿が見られた。



写真1 実物を鑑賞している様子

c 思いを明確にするグループの編成と活動について

興味・関心の高い手工芸品別に班を編成し、他者の意見も参考にさせながら視野を広げるグループ活動を行った。さらに歴史や素材など観点を選択させ、知識が深まるような内容にした。また、班で手工芸品を紹介するカードを作成することで、知識の深まりと他者へ自分の考えを分かりやすく伝達する（次頁写真2）ためにまとめるといった表現力の高まりを図った（次頁図4）。それま



小さい湯飲みとかに、ちゃんと絵がかいてあってすごいと思いました。

写真2 手工芸品の紹介（思いを伝える活動）

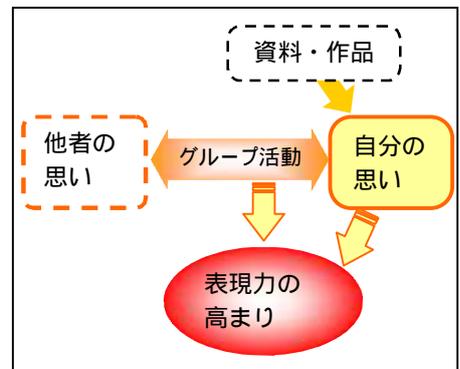


図4 表現力の高まり

で抽象的な表現や感想を書いていた生徒が、紹介カードを作成する際に他者の観点や意見を参考にしていた。その結果、「朝鮮の（陶工の）技術で唐津焼が発展したと知ってびっくりした。（唐津焼）」、「ビードロは、新しいイメージがあったけど、昔からあって技法も守り続けられていて、すごいと思った。（肥前ビードロ）」、「とても色鮮やかで青を基調としていた。（有田焼）」など、具体的な表現が見られるようになった。

d 鑑賞活動を生かしたデザインについて

身近な自然をモチーフにした手工芸品のデザインをさせることで、郷土に対する思いが膨らむものとする(図5, 6)。アイデアスケッチをさせる際には、デザインするときのポイントを提示したり、既習の内容を振り返らせたりしながら活動を支援し、自分の思いを明確にとらえさせた。また、作品の作成後、自己評価と相互評価をさせ、相手の考えや作品のよさに気付かせる場を設定した。構成の

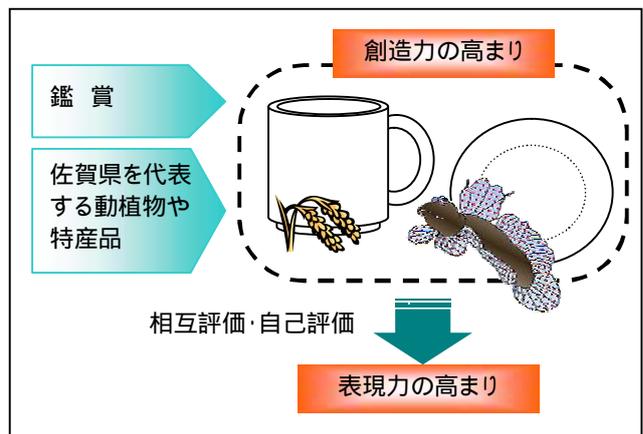


図5 鑑賞活動による創造力, 表現力の高まり

方法や技法にあったデザインなど鑑賞した手工芸品を参考にして描く姿が見られた(図7)。



図6 生徒作品



図7 手工芸品のデザイン

地に呉須の青色を配色して、全面に白石の特産品であるレンコンを構成している。

6 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究の成果

ア 身近な生活にかかわりのある題材に取り組ませることは、実生活に生きて働く力を身に付けるために有効な手段の一つであることが分かった。生徒の44%が自分の身の回りにある日用品を見直し、手工芸品と比較するなど、生活の中の造形的なよさや美しさを再確認する姿が見られた(次頁表1)。

また、既習の内容を振り返らせる授業の展開をすれば、授業で学んだことが日常に生かされることを一層実感させることができる。今回の授業では、総合的な学習の時間で郷土のことについて学習したことや前題材の「自然物の構成（モチーフの単純化や強調）」など既習の内容を創造活動に

表1 生活の中で振り返っている表現の例

| | |
|-------------------------------|--|
| ワークシート2 (4 / 34名) 「～と比較して」 | ワークシート5 (11 / 34名) 「佐賀県の手工芸品の見方や考え方について、授業の前後でどのように変化しましたか。」 |
| 家のコップ, 家の湯のみ, 家のカーペット | <ul style="list-style-type: none"> ・ これからも手工芸品があったらじっくり見ていきたい。 ・ 作ってみたいと思った。 ・ 今度家にないか探してみようと思う。 ・ この授業を大人になっても覚えていたら友達とかにも教えてあげたい。 ・ 有田焼は家にもあって、3～4枚比べてみると、少しずつ違うところがあった。 |

取り入れたことにより、発想や構想の能力が高まった生徒が増えた。

イ 発想・構想と表現を生徒は繰り返すことで美術の基礎的能力が身に付き、創造力、表現力の高まりを望むことができる。鑑賞活動では、作品の背景（歴史、技法、素材）を知り、鑑賞するための観点を理解することで具体的な感想を述べるができる。また、理解した内容を人に伝えることで、さらに表現力を高めることができる。このことにより、表現をする過程で、資料を参考にさせることやワークシートに自分の考えを書きとめさせること、グループで話し合わせることなどのアイデアをまとめる活動を取り入れることが、創造活動において効果的であることが分かった。

ウ 創造活動においてグループ活動に取り組みせることは、自分の思いを明確にさせる手助けとなることが分かった。他者と意見交換をすることや考えを参考にすることで、見方や感じ方が広がり、自分の思いを一層明確にすることができる(図8)。今回の題材で、事前の調査では手工芸品について何も書くことができなかった生徒が、紹介文や感想を書くことができるようになったのは、他者の考えを参考にしたり、アドバイスをもらったりした結果である。

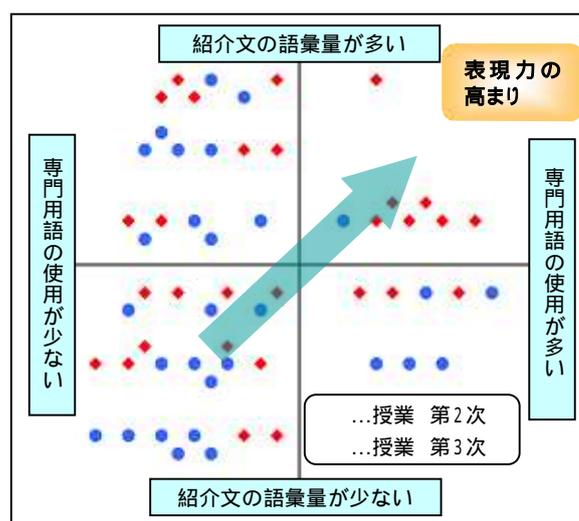


図8 グループ活動による生徒の変容

エ 鑑賞活動終了後、表現活動に取り組みせることは、美術を楽しむことへの相乗効果を期待することができる。生徒は、手工芸品を鑑賞したことで、つくることへの興味・関心が高まった。そのことによって、表現活動の過程で造形的なよさや技法の工夫点など、鑑賞した内容を参考にする姿が見られた。

(2) 今後の課題

ア ワークシートの活用で、生徒の発想・構想する力は高まっているが、活動のための参考資料をより活用しやすくするために教材の開発をしていきたい。

イ ワークシートの記述や作品から、創造力、表現力の高まりを客観的に見取るための評価方法をさらに工夫していきたい。

《引用文献》

- 1)2) 文部省 『中学校指導要領解説 美術編』 1999年 開隆堂出版 pp. 2 - 3 p.88
- 3) 遠藤友麗 「実生活との関連を生かした指導の充実を図るために [美術]」 『中等教育資料』 2006年6月号 ぎょうせい p.33
- 4) 遠藤友麗 「豊かな感性の涵養と実生活に生きて働く図工・美術の指導」 p.10 2006年 <http://homepage.mac.com/yamazakimasaaki/.Public/> これからの図工美術教育 /200606END0Usensei.pdf (2008年3月)